

# 永遠に眠れる森の美女

【台東区・上野】オリエント工業

昭和通りに面した、上野の小さな雑居ビル。2階に上がってドアを開けると、そこにはおだやかな灯りに照らされて、数十人の美女が寛いでいた。小学生にしか見えない少女から、アイドル系、微熟女まで。あるものは普段着を身につけ、あるものはほとんどなにも身につけず。こちらを向いて、微笑んで。ひとり黙ったまま……そう、彼女たちは人間ではなく、もっとも精巧に作られた人形=「ラブドール」だ。

台東区上野に本社を置くオリエント工業は、日本でもっとも大手の、もっとも精巧なラブドールの製造販売元である。そしてここは、上野に設けられたオリエント工業のショールームなのだ（上野のほかに大阪にも設けられている）。

オリエント工業は1977年創業。来年（2012）で35周年を迎える、業界の老舗メーカーだ。創業者であり、いまも第一線で指揮を執る土屋日出夫さんは1944（昭和19）年、横浜生まれ。もともと会社勤めから、オトナのおもちゃ屋経営に転じたという異色の経歴の持主である――

僕は横浜の麦田っていうところの生れで、元町のすぐ近く。元町はオシャレでしょ、麦田はあんまりオシャレじゃないけどね（笑）。それで、最初は会社勤めのサラリーマンだったんですけど、新宿でオトナのおもちゃ屋をやってるひとと知りあったんですね。いまはもうないけど、歌舞伎町の区役所通りで。まあ、自分でもああいう柔らかい商売っていうか、そういうのが好きで、ちょっとやってみようかなっていう感じになって。で、横浜をやめて、



初めて東京に来たわけです。

そこは新宿のほかに上野にも店を持ってたので、僕も新宿と上野を行ったり来たりしながら2、3年働いて、それから独立して浅草で自分の店を持つことになったんですね。

昭和40年代後半から50年ごろの話ですが、そのころがオトナのおもちゃ屋の全盛期でした。でも、（お上がる）うるさい時代でもあって。いまはふつうに週刊誌にも出てるけど、当時はアンダーヘアすらとんでもないという時代だから。

サラリーマンからオトナのおもちゃ屋経営に転身した土屋さんは、まもなく浅草で店を2軒持つまでになる。そのころ店でよく売れていたのが「ダッチワイフ」。空気を入れて膨らませる、まさにおもちゃのような性具だった。

当時は女性用に、まだバイブルーターがな

い時代ですから、肥後ズイキだとか、電動のないコケシ、それにちょっとしたリングだとか、つける薬だとか。男性用には空気袋のダッチワイフと、あとスポンジでできたものぐらいがメインだったんです。それから電動ものが始めて。最初は今までいうローターみたいなもの、それからコケシ型になったんだけど、ひとの顔をつけて民芸品という形で売ってました。そうじゃないと許可が下りなかつたので。いまは秋葉原のアダルトショップとかでも、男性器そのままのモノが売ってるでしょ、びっくりしますよね。昔はそんなの、とんでもないことでした。

毎日店に出て、接客をしていた土屋さんは、そのうちにあることに気がついた。ビニール風船のような胴体に、漫画チックな顔がついただけ、それでも当時の値段で1～2万円はしたダッチワイフが、よく売れる。売れるけれど、

粗悪品が多く、体重がかかるとすぐに空気が漏れたり、破裂したりする。しかもそんなダッチワイフを真剣な顔で求めに来るのは、エロマニアというより、からだに障害を負ったり、伴侶を失ってこころに傷を負ったりして、女性とともに接することの難しい男性が、思いのほか多かった。そこから、ただの性処理用具ではなく、「かたわらに寄り添い、こころの安らぎを与えてくれるような存在」をつくりだそうという、土屋さんの探求がスタートする。

浅草でおもちゃやっているときですが、ビニールのダッチワイフ、箱に直接女性の絵が描いてあるだけのようないいのが、1万円、2万円なんです。それをぼくはきれいなクラフト用紙に包んだり、自分で『南極』って書いたり、ちょっと違う感じにして高くして売ったら、売れるんですよね、これが。



©SAI

©Chikumashoko Ltd. 2012 All Rights Reserved.